九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[017]九州大学附属図書館付設記録資料館ニューズレター

https://doi.org/10.15017/6787380

出版情報：九州大学附属図書館付設記録資料館ニューズレター. 17, pp.1-, 2023-03. Manuscript Library, Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY MANUSCRIPT LIBRARY

NEWSLETTER

九州大学附属図書館付設記録資料館 ニューズレター

ISSN1881-879X

2023 VOL. 17

CONTENTS

- 特集 …… 1
  資料からみる糸島の歴史
- 研究 …… 5
  記録資料館研究会
- 活動トピック …… 9
  「大阪塩町四丁目町内記録」
- 令和4年度記録資料館組織 …… 9
- 刊行物紹介 …… 10
- 令和4年活動記録 …… 11
- 編集後記 …… 11

『嘉穂炭礦絵葉書』（産業経済資料部門所蔵）

九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

特集　資料からみる糸島の歴史

記録資料館には、九州地域を中心とした主に近世から近代にかけての歴史資料が保存されています。これらは、九州大学におけるこれまでの研究活動のなかで長い時間をかけて収集・蓄積されてきたものであり、有機的まとまりをもつ地域資料群を形成していると言うことができます。

本特集では、三苫家文書と麻生家文書（寄託）から、糸島半島西側の船越湾周辺における幕末期の新田開発と明治期の船越鉄道敷設構想について見ていきたいと思います。近世から近代にかけて糸島の開発はどのように実施され、または構想されていくのでしょうか。

1. 近世における辺田潟の開発

志摩郡では近世初頭より耕地を開発するために、藩が主導した海辺の干拓が行われてきました（江藤彰彦「開発と領主の関心」『福岡県史　通史編福岡藩（一）』（福岡県、1998年）683頁、前田時一郎「志摩郡の新田干拓」同書780・81頁）。本稿では志摩郡の近世干拓のうち、三苫家文書に記録が残る幕末期嘉永年間（1848–53）の辺田潟の開発について見ていきたいと思います。

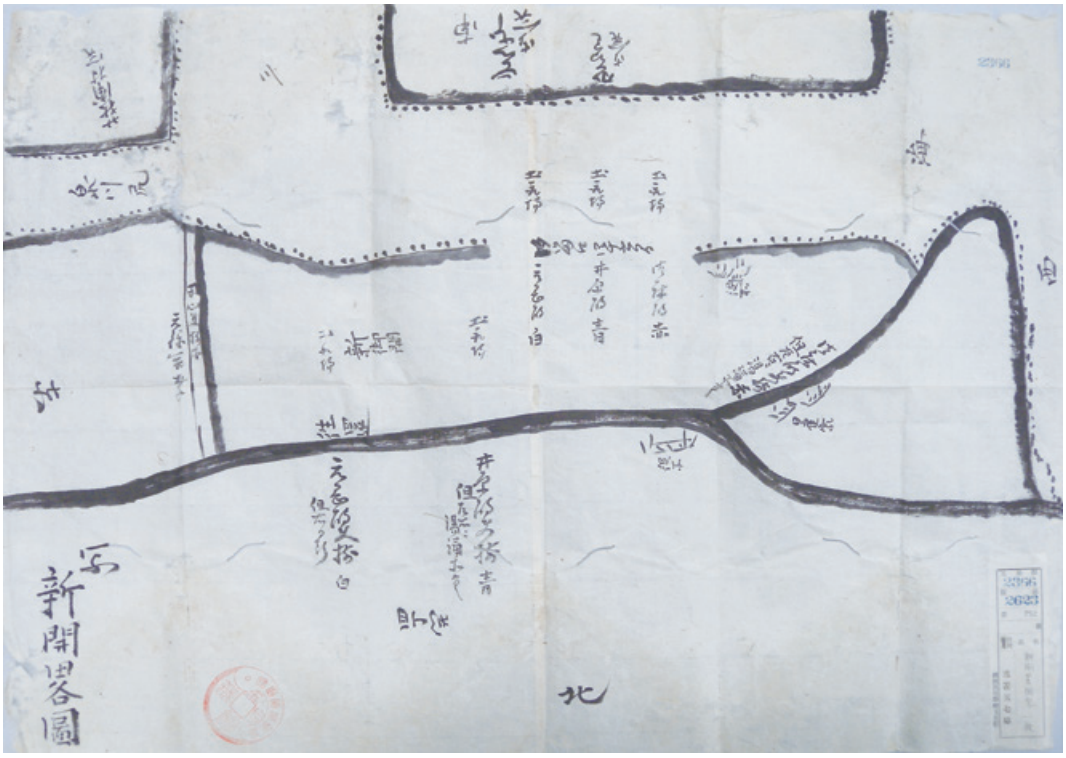


写真1「新開畧図」（三苫文書2366）

写真1は、画面左下に「新開畧図」と書いてあることから、新田開発の景観図であろうと思われます。図中東側（写真左側）に「泉川尻」、西側（写真右側）に「海」とあり、描かれているのは泉川の河口付近（現在の糸島市志摩小富士）です。江戸時代に福岡藩領志摩郡辺田村に属していたこの場所は「辺田潟」と呼ばれていました。

図中を東西に走る「往還」からみて南側（写真中央）にあたる「新御開」と書いてある部分がこの図の主題となっている干拓地です。「御」とあることから、藩の関与が考えられます。河口に接して「汐留口四十六間」と書かれています。「汐留口」の手前には「御床触　赤」・「井原触　青」・「元岡触　白」とあり、周りは「土取場」となっています。なお、この図は写のため、赤青白の彩色は施されていません。近接して「役所」二ヶ所と「日雇家」も描かれており、この時の干拓工事には、藩の役人から日雇の労働者に至るまで多くの人々の関与があったことがわかります。

「新御開」の西端をみると「御床触夫揃　赤」「但左右ニ湯桶所有之」と記されています。「新御開」の北側「四町開」（宝暦2年開）（前掲書780頁）の往還寄には「井原触夫揃　青」と「元岡触触夫揃　白」とがあり、やはり「湯桶所」もあります。この三ヶ所は、村々の「出夫」が触毎に集合して作業が始まるまでの間控えておく場所ではないかと考えられます。「湯桶所」は作業で汚れた体を洗い落とすために設けたのでしょうか。このほか「新御開」東側の「元禄開土手」には「用心夫揃所」があります。

当時の干拓技術から推測すると、本図は、干拓地の海水が引いた大潮の干潮時に、汐留のために土俵を積み上げる御床触・井原触・元岡触の村々から出された「出夫」の配置図と言えるでしょう。

福岡藩では十数ヶ村の村々を束ねて触と呼び、触ごとに大庄屋が置かれて広域行政を担っていました。御床触、井原触、元岡触のように、大庄屋の居村の村名を冠して呼ばれました。三苫家文書とは井原触の大庄屋を勤めた三苫家に伝わったものです。

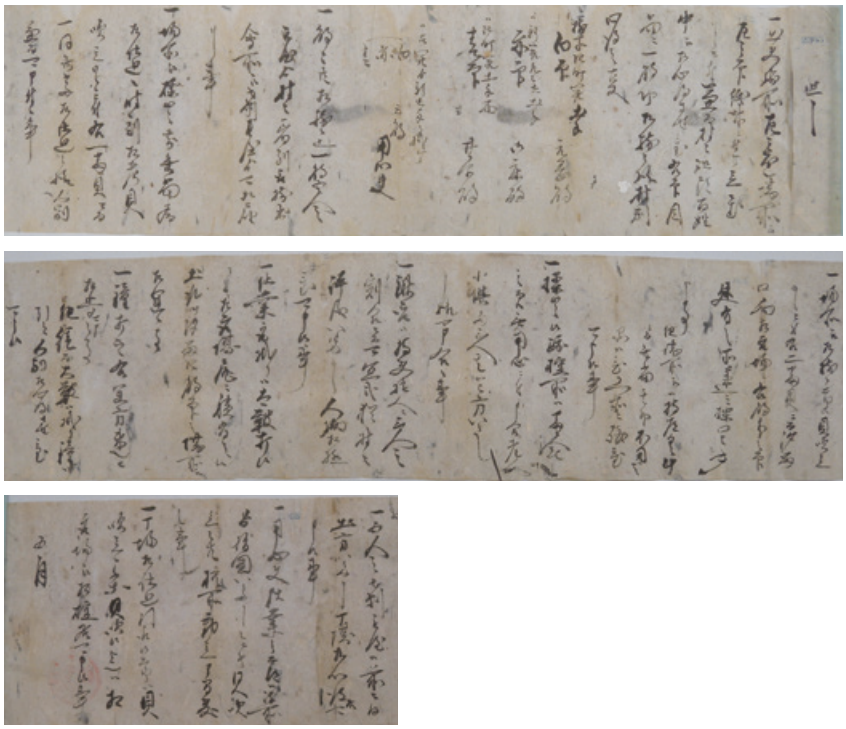


写真2「覚」（三苫文書2363）

写真2は、「新開畧図」とともに三苫家に伝わった、干拓作業を細かく指示した文書です。これによれば、「出夫揃所左之通場所え左之印紙、竹ニ付ケ立置」とあり、触毎の「出夫揃所」に白赤青の目印の紙を付けた竹が立てられていたようです。「出夫」の行動は、「場所え操出前、弁当為相仕廻候時刻相かんがえ、貝吹立」であるとか、「二番貝ニて汐留口向相取場ニ右触分之印建有之所ニ速ニ操出」などとあるように、音によって指揮されていたようです。作業開始の合図には太鼓の音が鳴り、「出夫」たちは「土俵」を汐留口に運びました。そして鐘打ちの音で「土俵」の運搬を止めます。「統て太鼓ハ掛り、鐘ハ引」というように合図が決められていたようです。多くの「出夫」が参集して行われた干拓工事の様子を想像することができます。

鍬を持って作業に参加する「出夫」も必要でした。作業中は道具以外不用な品を「ひかえ所」に残しておき、番人として老人や子供2・3人を配置しています。「用心夫」については、役所からの指示があるまで「控所」（写真1では「用心夫揃所」）に待機することになっています。

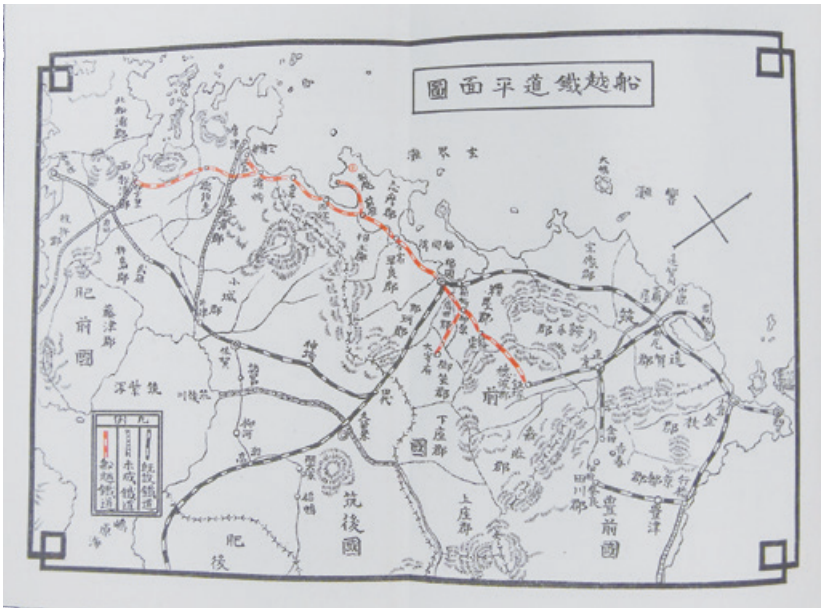
再度写真1を見てみましょう。「新御開」の周囲は全て干拓地であることがわかります。東側の「元禄開」は名前の通り元禄期に開発された干拓です。北側の「四丁開」は宝暦2年に開かれたものでした。南側は泉川尻をはさんで対岸にも「荻浦村開」、「岩本御開」、「加布里御開」と干拓地が広がっていました。『新開畧図』からは、糸島半島の近世は干拓の時代だったと言えそうです。

梶嶋　政司（九州文化史資料部門）

2. 船越湾を開発する　―船越鉄道と船越築港―

「志摩の半島頸を横過し去れは、船越湾の突として陸地に弯入するに会す可し、是れ嘗て我海軍の夙に注目せし一要地なり、此地を修築して一港を開き、更に之を起点として一線の鉄路を東西に馳せん乎、筑西肥東物産亦此に吸集するに難からず、所謂船越鉄道会社は此両工事を目的として起れり、而して今や其船越鉄道は業に既に政府の許可を得たるあり、是よりして此の港頭より新に呑吐の一口は開けなん」（三宅雪嶺ほか『秋声白露』〔研学会、1898年、214、215頁〕と語られたごとく、糸島郡小富士村（現・福岡県糸島市）にある船越湾は1890年代より港湾として注目されていました。

その船越湾を港湾として活用するために、そこに至る鉄道を敷設することを掲げ、1896年10月船越鉄道株式会社が設立されました。1890年代の福岡県下には、すでに九州鉄道、筑豊鉄道、豊州鉄道といった石炭運輸を主とする産業鉄道が敷設された一方、西側の交通インフラは充分に整備されていませんでした。同年4月28日、福岡視察にきた金子堅太郎農商務次官は前原町に至り、船越湾開発の有益妥当性を論じた所説を述べ、船越鉄道や船越湾開発に懸ける地元の熱気は盛り上がったといいます（山崎藤四郎稿、中村浩理編『博多灯台事件顛末記』〔斎藤俊彦、1964年〕、13頁）。



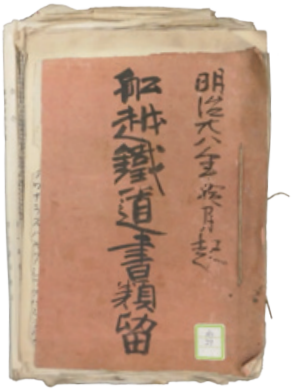
【写真1】「麻生家文書」わ-29

船越鉄道は、志摩郡小富士村大字船越より前原、怡土郡周船寺、早良郡姪浜、福岡市博多、粕屋郡仲原、新原及び宇美を経て太宰府に至る27マイル（郡は当時の表記による）、仲原より笹栗を経て穂波郡飯塚に至る17マイル、前原より怡土郡深江、吉井及び佐賀県東松浦郡濱崎を経て満島に至る20マイルの三線路を包含した全線約64マイルを敷設する計画を掲げました（【写真1】）。発起人会で選ばれた創立委員は、磯野七平、石野寛平、林田守隆、十時一郎、小河久四郎、太田清蔵、津田守彦、中尾卯兵衛、上野弥太郎、野田卯太郎、是松右三郎、神武啓蔵、麻生太吉、宮城坎一、守永久吉の15名（肩書などは省略、以下同）であり、収入としては、石炭と普通貨物運輸、乗客運賃とを区別し、三池、粕屋、嘉麻、穂波各郡で産出された石炭の運搬に力点を置いた計画を立てました。とりわけ筑豊に関しては水運と既設鉄道の運炭力が不足しているため、新たな運輸方法が求められており、船越港は天然良港にして九州西海岸の拠点として大いに期待が集まっているとされます。結果として、会社設立の出願は、船越鉄道株式会社と濱崎鉄道株式会社を同時に申請し、前者が後者を吸収する形で船越鉄道株式会社は誕生しました。そして、7月14日の開かれた取締役会の結果、専務取締役に小河が、支配人

に宮城が選出されました(「明治廿八年拾月起　船越鉄道書類留」「麻生家文書」わ-29)。

その後、8月10日、仮免状が公布され、株主の募集に入ります。東京では、旧福岡藩主・黒田長成を筆頭に、渋沢栄一、大倉喜八郎、団琢磨などが株主となり、大阪でも大々的に株主を集めたようです(「船越鉄道」『鉄道』第14号、1896年8月)。さらに、10月25日午後1時、福岡市博多水茶屋集成館において創業総会を開き、定款の確定、創業費の承認を決議し、役員を選出しました。取締役は、原六郎(ただし辞退)、土居通夫、小河久四郎、野田卯太郎、石野寛平、津田守彦、中尾卯兵衛、太田清蔵、川原茂輔、監査役は渡邊治右衛門、田中市太郎、上野弥太郎が就任しました(「船越鉄道創業総会」『鉄道』第24号、1896年11月)。翌年、船越鉄道は私設鉄道敷設免許状を逓信省に申請し、6月17日付で、船越から筑豊鉄道飯塚停車場間、前原から佐賀県満島間、佐賀県濱崎から伊万里鉄道伊万里停車場間、仲原から太宰府間の許可を得ました(『官報』第4199号、1897年7月2日付)。

しかし、日清戦後の恐慌により、船越鉄道は当初計画に即した事業を展開することができず、株金払込も見込み通りに進みませんでした。305万円の株式発行に対して、1897年10月30日に開催された第1回報告では約297万円の払込未済株金が計上される窮状でした(前掲「明治廿八年拾月起　船越鉄道書類留」)。さらに物価騰貴と相俟って、鉄道敷設にかかる予算は当初の305万円では足りず、530万を要するともされ、結局、1898年5月、九州鉄道が船越鉄道を買収し、敷設権を譲渡することとなりました(「九州鉄道と船越鉄道」『工談雑誌』第105号、1898年3月、鉄道大臣官房文書課編『日本鉄道史』中編、鉄道省、1921年、686、687頁)。船越鉄道と船越湾開発は志半ばで挫折することとなり、そのためか、これまで研究でも十分に着目されることはありませんでした。とはいえ、それ以後も、当時の福岡の人々は船越湾や今津湾を注目し続けており、港湾開発とそこに至るまでに輸送手段――線路をいかに敷設するかは常に議論が続けられました。


【写真2】

【写真3】

【写真4】

ところで、麻生太吉が創立委員の一人として名を連ねたこともあり、「麻生家文書」には船越鉄道に関する書類を綴った簿冊(【写真2】、【写真3】、【写真4】)や関連する書簡が散見されます。創業総会にかかる議事大要、会社定款や株主名簿といった会社の公的な書類もある程度残っているだけでなく、粕屋郡の炭田買収にかかる利益見込みの廉書などもあり、麻生が船越鉄道に少なからず注視していたことがうかがえます。ただし、「麻生家文書」に残された簿冊では、委任状の手控えも多数綴られており、麻生は船越鉄道にどの程度コミットしていたか、現段階で相応の結論を出すことは難しいところです。

確かに経過だけ見ると、船越鉄道の設立とその解散は日清戦後に叢生した企業勃興の徒花かもしれません。一方、筑豊炭の運搬という観点から見ると、若松・門司とは異なる新たな輸送路が断続的に構想され、その実現を夢見る人々の様々な思惑が間歇泉のごとく噴出していたとも言えます。さらに、糸島地域から見ると、船越湾開発の計画が石炭産業と密接に連動しうるものであった可能性も指摘できます。そのような福岡県の近代化をめぐる文脈に船越湾の開発を置いてみると、果していかなる像が描けるでしょうか。史料の詳細な分析が待たれます。

原口　大輔(麻生家文書研究部門)

記録資料館研究会の概要

2022（令和4）年10月21日（金）の午後、伊都キャンパスのイーストゾーンにある九州大学附属図書館4階「きゅうとコモンズ」におきまして、産業経済資料部門と麻生家文書研究部門の合同による記録資料館研究会が行われました。コロナ下の平日にもかかわらず、学外研究員の先生方や、九州大学の教職員・学生さんなど延べ30人を超える参加者があり、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

当日は、最初に資料庫へと移動し、平将志助教から北海道炭礦汽船会社資料についての、原口大輔講師から麻生家文書についての、受け入れや現在の状況についての説明がありました。その後、ふたたび「きゅうとコモンズ」へと移動し、学生さんたちなども加わり研究会が行われました。詳しくは後段の各発表者にゆずりますが、第1報告を原口大輔講師が、第2報告を宮地英敏准教授が、第3報告を三輪宗弘教授が行っています。

なかなか毎年という訳にはいきませんが、今後も、企画を考えていきたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

宮地　英敏（産業経済資料部門）

麻生家文書の整理の現状について

報告に先立ち、資料庫にある「麻生家文書」の保管状況について参加者に見ていただきました。写真にありますように、これまで記録資料館で使用してきた段ボールの文書箱から、中性紙による文書箱へと入れ替えを実施し、また史料も一点ごとに中性紙封筒（AFエンベロープ）に入れ直すことで、史料の保存状況の改善と出納の利便性が上がっていることを説明いたしました。

その後、Sky Cute.Commonsで標記の報告を行いました。報告では、株式会社麻生よりの寄附金により、10年間の時限設置として記録資料館に麻生家文書研究部門が設置され、これまで産業経済資料部門が管理していた「麻生家文書」が一時的に麻生家文書研究部門の管理下となったこと、そして、本部門は、「麻生家文書」目録データベースの公開・充実により研究基盤を創出し、学内外の研究者と提携し、「麻生家文書」を核とする石炭産業をめぐる包括的研究の推進を図ることを目的としています。その史料整理については、学生アルバイトを雇用し、日々史料整理を行い、また過去に作成された目録との現物照合や情報の加筆修正を行い、データベース公開に備えています。具体的には、図書館ホームページに「麻生家文書目録データベース」の公開ページを作成中で、2022年10月から11月に公開予定です（11月に公開されました）。今後の展望としては、膨大な「麻生家文書」の整理を日々継続し、またその成果を目録や論文、さらには展示などで発表し、「麻生家文書」の意義を多くの方に知っていただき、研究に活用してもらうことが課題となります。

【麻生家文書目録データベース】
https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_browse/aso/

原口　大輔（麻生家文書研究部門）

川村純義と新入炭鉱

第二報告では、福岡県直方市にかつてあった新入炭鉱についての報告をおこないました。新入炭鉱は、明治期の三菱の最大の炭鉱でした。大正から昭和にかけて、上位の出炭高をほこったことでも知られます。この三菱にとって重要な炭鉱は、三野村利助の上新入鉱区と川村純義の植木・中山両鉱区を買収したものでした。そのうち、後者の鉱区についてその買収へと至る経過について報告しました。

内閣制度の創設に際して、川村純義は薩摩出身者ながらに海軍卿から大臣ポストへの横滑りをすることに失敗してしまいます。薩長出身で省卿のポストにあった者のうち、ただ一人、大臣になれなかったのが川村純義でした。

一方で、新入炭鉱のある一帯は、海軍が艦船用の石炭のために目をつけた場所でした。川村純義が去ったのちの海軍では、新入炭鉱の一帯と長者原付近（のちの新原炭鉱のあたり）を有望視する報告書が作成されました。ところが海軍内の極秘資料が、なぜか海軍を去った川村純義の手元にわたってしまいます。のちに子ども同士が結婚することになる樺山資紀が海軍次官でしたが、詳しいことは分かりません。

宮中顧問官という閑職におかれた川村純義は、この海軍の極秘資料の情報をもとにして炭鉱開発を企図したのでした。そして、日本坑法という法律で地上の土地所有権と地下の炭鉱採掘権が分離されていたにもかかわらず、川村純義は地上の土地所有者たちとの交渉に奔走します。その交渉は難航しましたが、なんとか国への採掘の申請を行ったのでした。

そのような中、川村純義は枢密顧問官へと転じます。また、植木・中山の両鉱区を国に申請していたものが、なんと他者との「競願」のために、選定から外されてしまいました。このため川村純義は炭鉱開発から次第に距離をとっていくことになります。1つには、川村純義は樺山資紀とともに鹿児島で吏党系の「政社」を作ろうとし、政治活動を画策していきます。それとともに、まだ申請が許可されていない植木・中山両鉱区を三菱へと売り払ってしまったのでした。正式に川村純義が権利を獲得したのは三菱との契約の4か月後でしたが、なんとか無事に三菱へと両鉱区は引き渡されたのでした。

以上のような報告について、会場からは、小島立教授（九州大学法学部）より報告の事例は他人物売買契約にあたるが、国が認める採掘権が他人物売買契約の対象になっていることに違和感がある旨のコメントをいただきました。民法典論争の時期の契約であり、どのようになっていたのか今後の検討課題です。

また荻野喜弘九州大学名誉教授より、選定前に三菱と契約することで三菱が主体的に国へと影響を与えたのではないかという質問がよせられました。当日は、そのような資料が無い旨のみを答えたのですが、明治14年政変を踏まえると黒田清隆の支持を失いかねないこと、日本郵船がまだ三菱系の社長ではなく農商務省系の社長であったことなどから、必ずしも三菱が前面にでることが両鉱区の選定に有利になるとは言い難いのではないかと、あらためて考えているところです。

宮地　英敏（産業経済資料部門）

麻生百五十年史の監修者として－方針と新たな発見－

『麻生百五十年史』の話が舞い込み、2年後に刊行したいという話でした。麻生百年史を執筆した田中直樹日本大学名誉教授に相談しましたが、5年は必要だろう、2年で書くとしたら、写真や映像を活用したビジュアルな仕上げの刊行物を出すしかないとのことでした。

藤本昭シニアアドバイザーは、麻生社員の教育用にも使える社史を刊行したいと話されました。麻生の経営基盤を築き上げた麻生太吉の為人や経営哲学を書いてほしいということも私に述べられました。

福岡大学非常勤講師の諸原真樹氏に麻生鶴十郎、先代の麻生太郎について書いていただきましたが、その中で麻生太吉の教育に対する考え方、子供に示した処世訓に紙幅を割いていただきました。また米国で病死した「鶴十郎」ですが、「つるじゅうろう」なのか「かくじゅうろう」と読むのか、裏づけを取りたかったのですが、「カクジユウロウ」と書かれたものを見つけたことが手掛かりとなり、「かくじゅうろう」とわかりました。先代麻生太郎の死因がスペイン風邪と関係があるということも判明しました。

麻生太吉は孫太賀吉を東京の学習院から福岡に呼び戻し、その前に麻生太郎の妻夏子（夏）の姉八重子の夫である野田勢次郎を久原鉱業から引き抜きましたが、孫太賀吉への事業の継承を考えたのでしょう。夏子の父親は鹿児島県知事を歴任した加納久宜です。野田勢次郎と九州帝国大学工学部河村幹雄教授が親しかった縁で、麻生太賀吉は河村幹雄の下で学び、薫陶を受けました。河村は敬虔なカトリック教徒であり、海軍軍人を九州大学工学部で引き受けました。

「程度大切、油断大敵」という社是には麻生太吉の石炭企業の経営の浮き沈みを経験したことが刻まれています。

『麻生百五十年史』を引き受ける際に、一次資料に準拠して書こうと考えました。資料を読み込んでいる、九州共立大学非常勤講師の新鞍拓生氏にお願いしたところ快諾いただきました。新鞍氏の長年の研究成果である『筑豊鉱業主麻生太吉の企業家史』（裏山書房、2010年）に依拠して纏めていただくことになり、明治期から昭和10年ごろまで、石炭と電力は見通しが立ちました。

近世後期から明治初期にかけては、九州産業大学古賀康士講師にお願いし、庄屋として麻生家を資料で裏付けられる範囲で裏付けてほしい、とりわけ米の生産に関する統計がないかお願いしました。

九州大学記録資料館の原口大輔講師には、多くの書簡を読み込まれていましたので、政治家としての貴族院で麻生太吉の活動に健筆いただきました。

東京大学社研の森本真世准教授にはこれまで研究をしてこられた納屋制度について書いていただきました。数式を使わずに、わかりやすい文章にするようにお願いしました。「納屋」には負のイメージがありますが、温情主義的な側面もあります。納屋頭は地方の政治家となるケースもあります。納屋制度は戦時中まで残っています。明治、大正、昭和と時代が下がるにつれて、労働環境は徐々に改善されていったのではないでしょうか（三輪の仮説）。

さて、筆者が担当したのは、新鞍氏が書かれていない日中戦争以降で、戦時中から閉山に至る激動期でした。日中戦争勃発を受け、召集などで鉱員や職員が戦地に赴く中、労務者の確保が喫緊の課題になったことや移入朝鮮人労働者の定着問題などを跡付けました。麻生では、昭和14（1939）年以前からすでに朝鮮人労働者が働いていましたが、既往朝鮮人が多いこと、逃亡してもまた戻ってきて働くことに着目しました。これまで筆者が集めた北海道博物館や茨城県立歴史館の資料を用いて、二年契約、一時帰鮮、出来高制の賃金（主に坑内）について紙幅を割きました。

戦後については、「営業報告書」で丹念に数字を拾いました。傾斜生産方式で石炭産業は活

況を呈したと一般に思われがちですが、「生活給」「能率給」という二つの考え方がありました。激しいインフレ下で「生活給」という考えで給与が支払われたために、赤字に陥り、「能率給」になったのはドッチの緊縮財政になってからでした。麻生は調査部門を充実させ、トップに情報が行き届くようにしています。吉鹿隆助課長が調査部門を牽引しました。

麻生が、石炭から石油へのエネルギー革命への産業構造の変化に直面する中で、麻生は吉隈炭坑にヒト・モノ・カネを集中して、生産効率を上げて、石炭企業としての生き残りを模索しましたが、自然条件に阻まれて頓挫しました。国は鉱区を買い取るなどして、閉山を間接的に促しましたが（閉山交付金）、国の支援・救済がなければ、金融恐慌の波が日本経済を襲ったことでしょう。

ライターの書いた原稿を読み、一次資料で社史を書くことの大切さを体感できました。文献だけで社史を書いた場合、表面だけの薄っぺらな文になり、周知のフレーズを単に繰り返すだけであることもわかりました。監修者として、大ナタを入れさせていただきました。

三輪　宗弘（産業経済資料部門）

トピック

「大阪塩町四丁目町内記録」の目録公開

本トピックでは、九州大学附属図書館付設記録資料館・法制資料部門所蔵の「大阪塩町四丁目町内記録」（Kj-O-95／496点）について紹介します。もとの資料名のまま「大阪」にしています。

塩町四丁目は明暦年間までに成立した大坂の町の一つであり、現在の大坂府中央区南船場町二、三丁目付近に相当します。町の運営に関わる史料が大半を占めており、塩町四丁目の町会所（町運営の拠点）において保管されていたものと考えられます。

本史料群は昭和9（1934）年に九州帝国大学が厳松堂書店より購入し、戦後は九州大学法学部の法制史料として所蔵されてきました。法制史料は、昭和5年より九州帝国大学法文学部の法制史講座を担当し、地域史料や経済史分野にも関心を持っていた金田平一郎氏（1900-1949）によって拡充されており、本史料群もかかる金田の意向や研究関心に基づき購入に至った可能性が高いとみられます。本史料群は、これまでもその存在自体は把握されていたものの、長らく未整理状態で保管されていましたが、箱崎から伊都への移転の後、令和3（2021）年10月より翌3月にかけて漸く整理が完了し、令和4年度刊行の『九州大学附属図書館研究開発室年報2021/2022』でその細目録を公開しました。

【写真①　「水帳」】

本史料群に含まれる主立った史料としては、まず町内の土地台帳である水帳が挙げられます。元禄7年・享保11年・安永7年・寛政10年・文化12年・文政8年に作成された分が残っていますが（写真①）、これはほかの大坂の町と比べても残り方としては良好で、水帳絵図も付属していることも特筆されます。

水帳以外のまとまった史料としては、町内規定を示した式目帳や、御触書の控え、宗旨人別改増減帳、捨子関係の文書が挙げられます。たとえば出銀など町内における取決めを記した寛政2年の式目帳（写真②）や、天保4年の借家式目帳など、また御触書は弘化2年・弘化3年・安政4年・文久4年の分が、宗旨人別改増減帳は元治～明治期の5冊が含まれています。また当時都市問題として認識されていた捨子の処遇や対応に関する文書としては、天明4（1784）年から明治2（1869）年までの23事例分があります。貴重な大坂の町方文書として、今後様々な観点からの活用が望まれます。

【写真②　「塩町四丁目式目帳」】

中川　晃一（人文科学府博士後期課程）

令和4年度記録資料館組織（令和4年4月1日現在）

附属図書館

記録資料館長
宮本一夫

記録資料館運営委員
委員長／宮本一夫
委員／岩田健治、森平雅彦、伊藤幸司、西英昭、清水一史、三輪宗弘、宮地英敏、細川聖二

産業経済資料部門
三輪宗弘教授、宮地英敏准教授、北澤満准教授（複担）、平将志助教

九州文化史資料部門
福田千鶴教授（複担）、伊藤幸司教授（複担）、梶嶋政司助教

法制資料部門
五十君麻里子教授（複担）

古文書・古記録部門
岩﨑義則准教授（複担）

麻生家文書研究部門
三輪宗弘教授（兼務）、原口大輔講師

刊行物紹介

産業経済資料部門

2022年、産業経済資料部門では、『石炭研究資料叢書』第41号と『エネルギー史研究』第37号を刊行し、論説4本、資料紹介4本及び目録1本を収載しました。

まず、『石炭研究資料叢書』では、原口大輔が、「新規整理分『麻生家文書』目録(二)」において、前号に引き続き麻生家文書の目録をまとめています。本号では、新規整理分の3,896点が掲載されています。平将志は、福岡県知事室企画局が作成した『デフレ政策の福岡県経済に及ぼす影響』の翻刻を行いました。同資料では、福岡県が、1954年の石炭不況に対して、どのような認識を有していたのかについて把握することができます。

つぎに、『エネルギー史研究』では、白鳥圭志が、「安定成長期における福岡銀行」において、安定成長期の福岡銀行を事例として、経営史的な視点から、同行が「決算承認銀行」から脱却後、安定成長することになった背後にある経営基盤などの諸変化をあきらかにしています。加藤健太は、「戦時体制下の富山県営電気事業」において、戦時体制下に日本発送電が電力設備を接収する過程で、地方自治体と政府間で、どのような議論を行ったのかについて、富山県営電気事業を事例として検討しています。宮地英敏・西尾典子は、「スカブラ孝」において、筑豊の炭鉱社会に見られたというスカブラについて、経済史・労働史、さらに文化人類学的な視点から、その実態について論じています。原口「冷水鉄道敷設問題と貴族院議員・麻生太吉」では、原敬内閣期以降における麻生太吉の政治行動について、冷水鉄道敷設問題を事例として考察を加えています。

資料紹介では、三輪宗弘が、「戦時体制の形成(一九三一～一九四五)」と「学徒動員・学徒出陣と敗戦(一九四一～一九四五)」の資料紹介を行っています。なお、これらの資料は、すでに『九州大学百年史』(電子媒体)で刊行されています。平は、田川公共職業安定所が纏めた『年報多加波』から、「炭鉱離職者対策史(昭和三四年度～昭和四八年度)」を紹介しています。この資料では、同職安管内における炭鉱離職者対策が、簡潔にまとまっています。

九州文化史資料部門

『九州文化史研究所紀要』第65号は、論考2本と史料紹介1本、高野信治先生業績目録を収載しています。

高野信治「石門心学道話にみる〈障害〉の比喩化—狂言台本に題材化との比較—」は、「社会的文化的に構築された観念」として障害を定義する立場から、室町期の狂言との比較で近世の石門心学のテキスト類にみえる「障害の表象表現」の特質を考察しています。

福田千鶴「高台院(浅野寧)に関する素描五点」は、「北政所」として知られる高台院の研究史上の問題点を指摘した上で、従来必ずしも史料的根拠が明らかでない問題について資料的根拠に基づいた再検討が加えられています。

つぎに、梶嶋政司「豊前小倉藩領田川郡金田手永大庄屋の『日記』—金田泰恒『天明四甲辰日記』—」は、九州文化史資料部門が所蔵する豊前小倉藩の大庄屋日記を紹介したものです。

令和4年3月に定年退職を迎えられた高野信治先生には、ご業績目録にご自身のコメントを付していただきました。

令和4年活動記録

1月18日	記録資料館定例ミーティング
1月20日	九州文化史資料部門会議
2月3日	九州文化史資料部門会議
2月9日	白石直樹（柳川古文書館）調査来館（文化史）
2月15日	記録資料館定例ミーティング
3月7日	記録資料館定例ミーティング
3月15日	第46回記録資料館運営委員会
3月25日	石炭研究資料叢書41号 『エネルギー史研究』37号（産経）
3月25日	『記録資料館ニューズレター』16号発行
3月31日	『九州文化史研究所紀要』65号発行（文化史）
4月1日	原口大輔講師着任
4月5日	記録資料館定例ミーティング
4月26･27日	高槻泰郎（神戸大学）調査来館（文化史）
5月10日	記録資料館定例ミーティング
5月12日	古川総一（武雄市図書館・歴史資料館）、 伊藤静香（千葉大学大学院）調査来館（文化史）
5月16日	図書館新任者研究受入
5月23日	九州文化史資料部門会議

5月26日	福岡市史編さん室調査来館（文化史）
5月30日	豊田祥三（鳥羽市教育委員会）調査来館（文化史）
5月31日	Martin Nogueira Ramos（フランス国立極東学院） 調査来館（文化史）
6月14日	記録資料館定例ミーティング
7月11日	九州文化史資料部門会議
7月12日	記録資料館定例ミーティング
7月25日	第47回記録資料館運営委員会
8月9日	九州文化史資料部門会議
9月5日	川端駆（東北大学大学院）調査来館（文化史）
9月12日	松久保修平（長崎県美術館）調査来館（文化史）
9月13日	記録資料館定例ミーティング
9月20日～22日	安高尚毅（小山工業高等専門学校）調査来館（文化史）
10月4日	記録資料館定例ミーティング
10月5日	ニューズレター編集会議
10月21日	記録資料館研究会開催（産経・麻生家文書） （於中央図書館4階Sky Cute Commons）
11月8日	記録資料館定例ミーティング
11月11日	柴田建哉（西日本新聞社）調査来館（文化史）
11月17日	「麻生家文書」目録データベース（第1回目22,439点） 公開（附属図書館Webサイト）（麻生家文書）
12月5日	福澤徹三（国文学研究資料館共同研究員）調査来館 （文化史）
12月8日～25日	「『麻生家文書』とその世界」展覧会（於中央図書館3階 エントランス／電子展示：附属図書館Webサイト）（麻生家文書）
12月13日	記録資料館定例ミーティング
12月23日	第47回貴重文物講習会講演「「麻生家文書」の「二重」の整理過程」 （原口講師・麻生家文書）

編集後記

記録資料館ニューズレター第17号をお届けします。本号では、「特集」として記録資料館の所蔵・保管資料からみる糸島半島開発の歴史、「研究」では2022年10月に開催された記録資料館研究会の概要について、とりあげています。

新型コロナウイルスの「5類」移行をまえに、ようやく研究会なども対面ベースで実施できるようになってきました。来年度は、さらに資料調査、研究発表とも、活発になっていくことを願いたいと思います。

（北澤　満）

九州大学附属図書館付設記録資料館
ニューズレター Vol.17

編集発行：九州大学附属図書館付設記録資料館
〒819-0395　福岡市西区元岡744
発行日：2023年3月

E-mail miwa.munehiro.535@m.kyushu-u.ac.jp（産業経済資料部門）
miyachi.hidetoshi.099@m.kyushu-u.ac.jp（産業経済資料部門）
bunka@lit.kyushu-u.ac.jp（九州文化史資料部門）
http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/libraries/manuscript